

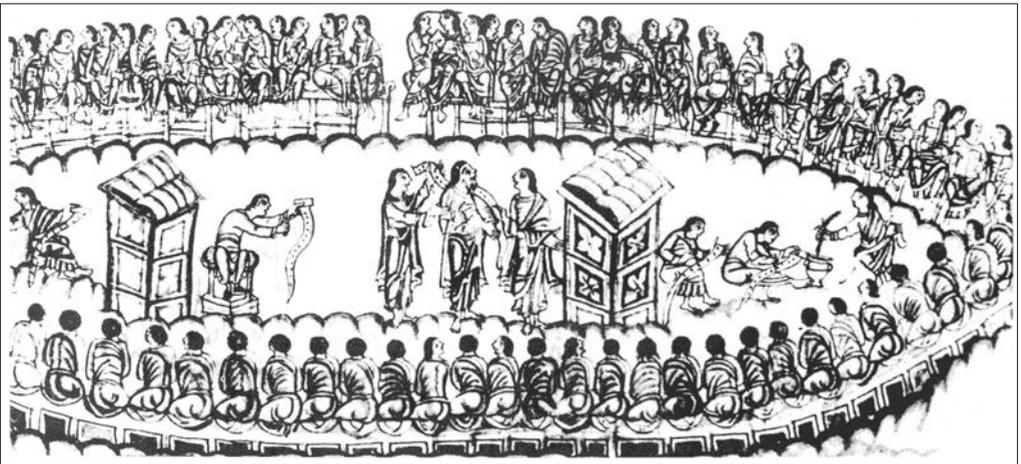
日本中世英語英文学会 第35回全国大会

プログラム・発表要旨

時：2019年11月30日(土)・12月1日(日)

所：東京未来大学

The 35th Congress
The Japan Society for Medieval English Studies
30 November - 1 December 2019
Tokyo Future University



日本中世英語英文学会

目 次

会長挨拶	3
会場案内	4
会場までのアクセス	5
東京未来大学詳細図	6
会場見取り図	7
プログラム	
第1日 11月30日(土)	11
第2日 12月1日(日)	12
Programme	
Saturday 30 November	15
Sunday 1 December	16
発表要旨	
第1日 11月30日(土) 企画シンポジウム	19
第2日 12月1日(日) 研究発表Ⅰ	21
研究発表Ⅱ	23
研究発表Ⅲ	24

11月11日(月) [必着] までに、申し込みフォーム：
<https://bit.ly/2H8SqQ8> (学会 ML 経由推奨)、
あるいは同封の葉書でご出欠をお知らせ下さい。

* 出張証明書が必要な方は、その旨をご記入下さい。

大会準備委員

林 邦彦 (委員長) 和田 忍 (副委員長)
伊藤 晝 岡本広毅 工藤義信 佐藤桐子 守屋靖代

開催校委員

宅間雅哉

事務局

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
慶應義塾大学文学部 堀田隆一研究室内
Tel. 03-5427-1226

会長挨拶

会員の皆様

仲秋の候、会員の皆様には、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。すでにご案内のとおり、日本中世英語英文学会第35回全国大会を、来る11月30日(土)、12月1日(日)の両日、東京未来大学にて開催する運びとなりました。ここに大会のプログラムをご送付いたします。会員の皆様がふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

本年度の大会は、数多くの研究発表に加えて、海外からの講師が加わった企画シンポジウムも予定されており、両日とも充実した内容になっているかと存じます。プログラムの企画・準備にご尽力いただいた大会準備委員会および開催校の先生に感謝します。それでは、お一人でも多くの会員の皆様に学会でお会いできますことを楽しみにしております。

2019年10月吉日

日本中世英語英文学会

会長 寺澤 盾

会 場 案 内

1. 各室，時間については，学会場詳細案内とプログラムをご覧ください。
2. 当日会員会費は，一般1,000円，学生・定年退職者500円です。
3. ハンドアウトは，各発表会場で配布します。
4. 懇親会費（一般 6,000円，学生 3,000円）は，当日受付でお支払い下さい。
5. ご来場は公共交通機関をご利用いただき，車でのご来場はご遠慮ください。
なお，鉄道各社の駅からご来場の場合，最寄駅は東武スカイツリーライン（東武伊勢崎線）「堀切」（徒歩2分）となりますが，「北千住」経由でお越しの場合は，改札口を出て荒川土手（階段16段）を上り，さらに跨線橋を渡る必要があります。この上り・下りを避ける経路として，若干距離は長くなりますが，東武スカイツリーライン「牛田」あるいは京成本線「京成関屋」からのご来場（いずれも徒歩8分）を推奨します。また，タクシーをご利用の場合，JR常磐線・東京メトロ千代田線・東京メトロ日比谷線・つくばエクスプレス・東武スカイツリーライン各線の「北千住」駅西口からのご乗車が便利です。通常，会場までの所要時間は10～15分，料金は1,000～1,200円です。
6. キャンパス内はすべて禁煙です。
7. 構内の食堂は，大会期間中，営業いたしません。「牛田駅」駅前にファミリーマート，「牛田駅」および「京成関屋駅」から会場へ向かう途中にファミリーマート，セブンイレブン，ココス，ジョリーパスタがあります。なお，「堀切駅」周辺に商店・飲食街はありません。
8. 当学会では宿泊施設の斡旋は行っておりません。

連 絡 先

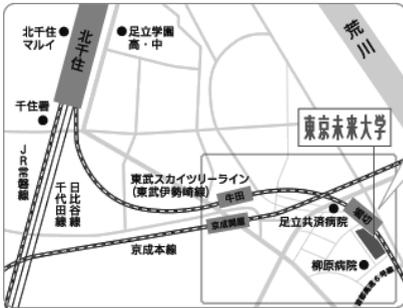
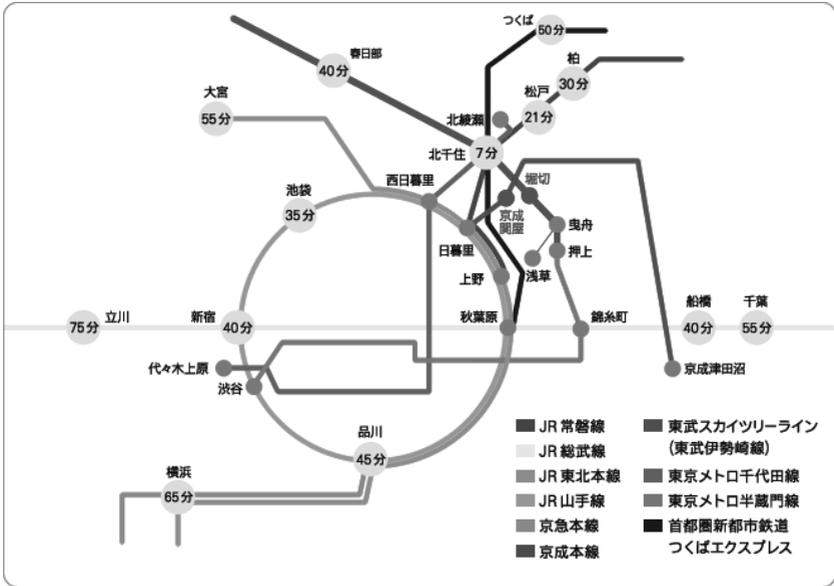
東京未来大学

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12

（大会本部：講義棟 A 3F 302教室）

開催校連絡先：宅間雅哉研究室 03-5813-2525（代）

会場までのアクセス



(東京未来大学 HP より一部転載)

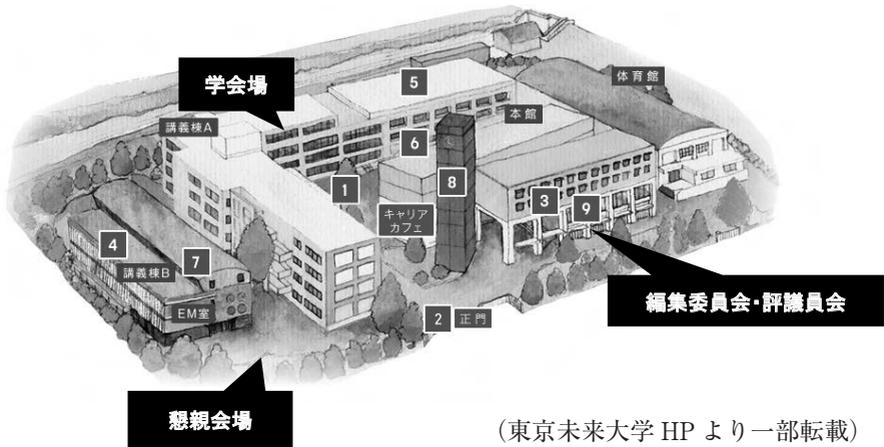
【東京駅から】

- ・「東京駅」にて JR 上野東京ライン勝田行きに乗り、「北千住駅」にて東武鉄道・東武スカイツリーライン（東武伊勢崎線）浅草行きに乗り換え、「牛田駅」もしくは「堀切駅」にて下車。「牛田駅」より会場校まで徒歩 8 分。「堀切駅」より会場校まで徒歩 2 分（「東京駅」から「堀切駅」までの所要時間は乗り換え時間も含めて約 30 分）。
- ・もしくは、「東京駅」にて JR 山手線（池袋・上野方面行き）に乗り、「日暮里駅」にて京成電鉄・京成本線に乗り換え、「京成関屋駅」にて下車。「京成関屋駅」より会場校まで徒歩 8 分（「東京駅」から「京成関屋駅」までの所要時間は乗り換え時間も含めて約 30 分）。

【羽田空港から】

- ・羽田空港から東京モノレールに乗り、終点の「浜松町駅」にて JR 山手線（池袋・上野方面ゆき）に乗り換え、さらに「秋葉原駅」にて東京メトロ日比谷線（北千住行き）に乗り換え、終点の「北千住駅」下車。「北千住駅」からは上記「東京駅」からの行き方を参照（羽田空港から会場校最寄りの「堀切駅」までの所要時間は乗り換え時間も含めて約 90 分）。
- ・もしくは、上記「浜松町駅」から JR 山手線（池袋・上野方面ゆき）に乗り、「日暮里駅」にて京成電鉄・京成本線に乗り換え、「京成関屋駅」にて下車（羽田空港から「京成関屋駅」までの所要時間は乗り換え時間も含めて約 80 分）。

東京未来大学詳細図（学会場周辺）



（東京未来大学 HP より一部転載）

学会場詳細案内

本館

3 F	編集委員会 評議員会	315 会議室 1 315 会議室 1
4 F	東支部幹事会	414 研究室

講義棟 A

1 F	受付 研究助成セミナー	エントランスホール 103 教室
2 F	研究発表 II 研究発表 III ポスターセッション 書籍展示 託児所	208 教室 204 教室 205 教室 205 教室 206 教室
3 F	開会式・総会 会長講演 企画シンポジウム	308 教室 308 教室 308 教室

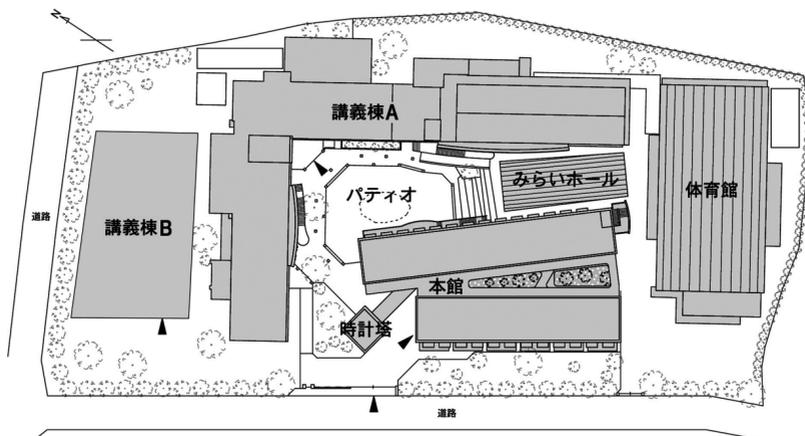
	研究発表 I	308 教室
	閉会式	308 教室
	大会本部・大会準備委員会控室	302 教室
	開催校準備委員控室	303 教室
	一般会員控室	304 教室
	司会者・発表者控室	305 教室
	第2回大会準備委員会	307 教室

講義棟 B

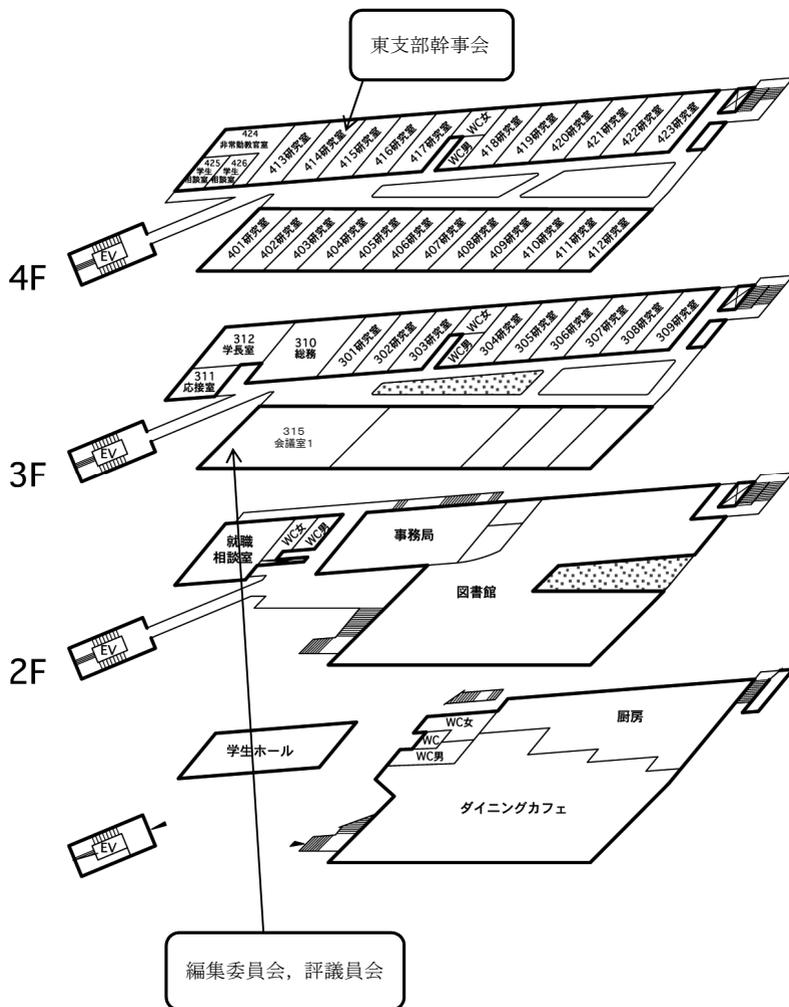
1 F	学生ホール	懇親会
-----	-------	-----

会場見取り図

【学内マップ】

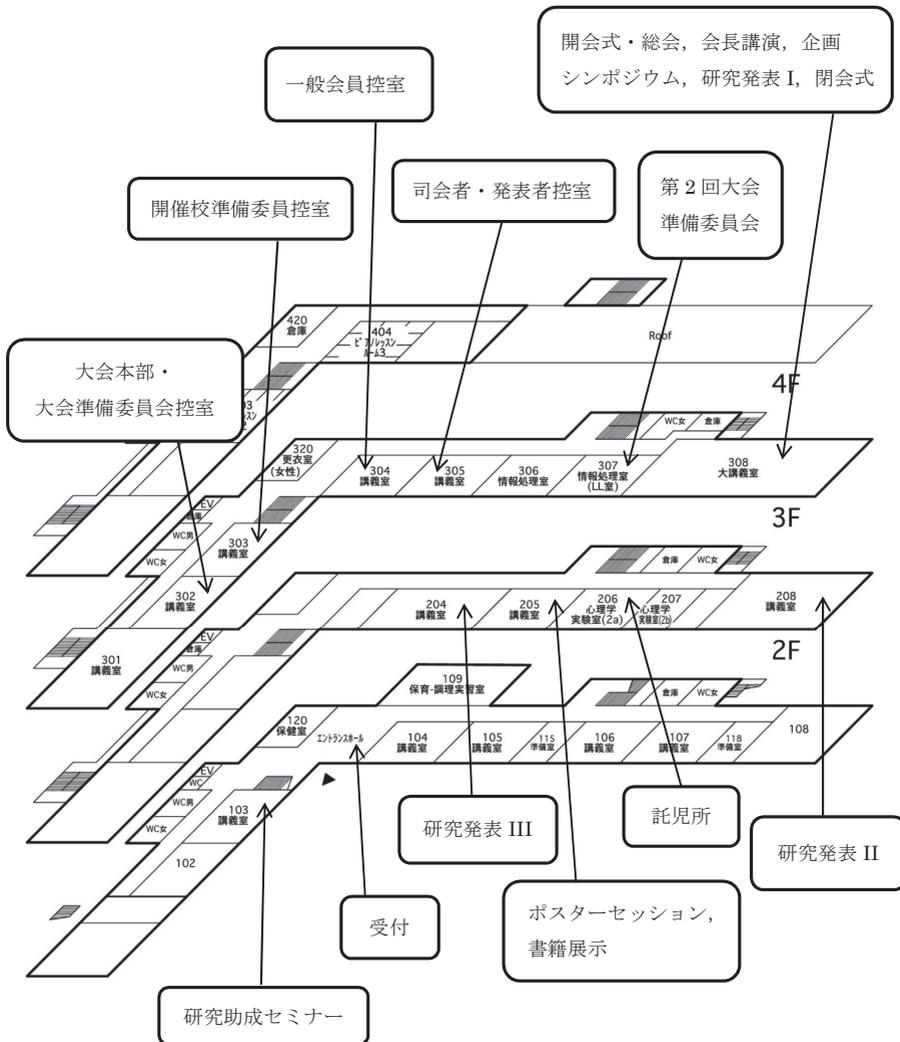


【本館レイアウト】

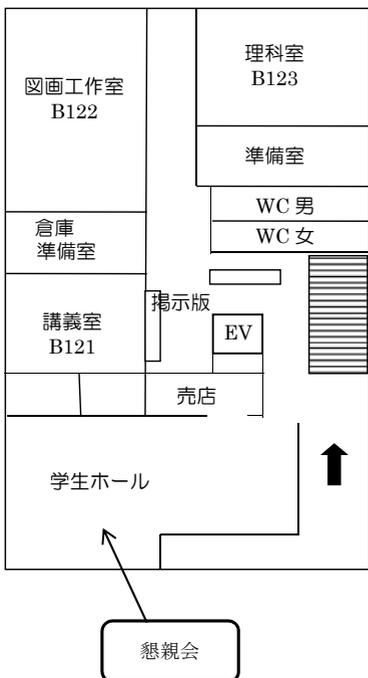


※編集委員会、および評議員会の会場は本館（時計塔のある建物）の3階となっております。時計塔下のエレベーターで3階へいらしていただき、3階でエレベーターを降りて直進すると、右側1つ目の部屋が、両会の会場となる「315会議室1」です。

【講義棟Aレイアウト】



【講義棟Bレイアウト】



日本中世英語英文学会 第35回全国大会プログラム

2019年11月30日(土)・12月1日(日)

東京未来大学

〒120-0023 東京都足立区千住曙町34-12

(大会本部：講義棟A 3F 302教室)

開催校連絡先：宅間雅哉研究室 03-5813-2525 (代)

第1日 11月30日(土)

11:30-16:00 **受付** (講義棟A 1F エントランスホール)
* 会員控室 (講義棟A 3F 304教室)

12:00-13:00 **ポスターセッション** (講義棟A 2F 205教室)

13:00-13:30 **開会式・総会** (講義棟A 3F 308教室)

	司会	狩野晃一 (明治大学)
開会の言葉	会長	寺澤 盾 (東京大学)
開催校挨拶	東京未来大学学長	角山 剛
議事		
事務局報告	事務局長	堀田隆一 (慶應義塾大学)
編集委員会報告	編集委員長	多ヶ谷有子 (関東学院大学)
大会準備委員会報告	大会準備委員長	林 邦彦 (尚美学園大学)
大会案内	開催校委員	宅間雅哉 (東京未来大学)

13:45-14:45 **会長講演** (講義棟A 3F 308教室)

	司会	地村彰之 (岡山理科大学)
『ベーオウルフ』をゆっくり読む	会長	寺澤 盾 (東京大学)

15:10-18:10 企画シンポジウム (講義棟A 3F 308教室)

Editing and the Interpretation of Texts:
Past, Present and Future Practices

総合司会 田口まゆみ (大阪産業大学)

討論司会 John Scahill (インサーチ, シドニー工科大学)

I. Editing a Four-Manuscript Diplomatic Parallel Text of *The Ancrene Wisse*: Aim, Procedures and Results

小野祥子 (東京女子大学名誉教授)

II. How Editing Monastic Foundation Narratives Uncovers their Meaning and Purpose

Janet Burton (ウェールズ大学)

III. Transcribing and Printing as Editorial Interpretations: A Comparative Case Study on *The Canterbury Tales*

大野英志 (広島大学)

IV. Choices Editors Make and their Consequences

Margaret Connolly (聖アンドリューズ大学)

V. Pepysian *Meditations on the Passion of Christ*: Its Editorial Procedures Revisited

家入葉子 (京都大学)

VI. The Middle English Texts Series (Heidelberg): Aims and Objectives

William Marx (ウェールズ大学)

VII. Editing Caxton's *Golden Legend* and the Materiality of the Text

徳永聡子 (慶應義塾大学)

VIII. From Editing Manuscripts to Editing Incunabula: Caxton's *Golden Legend*

John Scahill (インサーチ, シドニー工科大学)

上記に含まれない討論登壇者

池上恵子 (成城大学短期大学名誉教授)

中尾佳行 (福山大学)

地村彰之 (岡山理科大学)

18:40-20:40 懇親会 (講義棟B 1F 学生ホール)

第2日 12月1日(日)

9:00-10:00 ポスターセッション (講義棟A 2F 205教室)

9:30-10:50 受付 (講義棟A 1F エントランスホール)

* 会員控室 (講義棟A 3F 304教室)

10:00-13:10 研究発表 I (講義棟A 3F 308教室)

10:00-10:40 司会 白井菜穂子 (文化学園大学)

1. The Earth Cries Out: Inanimate Auralty in Anglo-Saxon Literature
Britton Brooks (東京大学)

10:50-11:30 司会 新川清治 (早稲田大学)

2. Cambridge Psalter の古英語行間訳語における主語表示
小林茂之 (聖学院大学・名古屋大学大学院
人文学研究科客員研究員)

11:40-12:20 司会 新川清治 (早稲田大学)

3. 行間注釈内の助動詞
小倉美知子 (東京女子大学)

12:30-13:10 司会 市川 誠 (東京理科大学)

4. Ælfric の旧約解釈——*De Natale Domini* における預言の引用とその文体
小川 浩 (東京大学名誉教授)

10:50-12:20 研究発表 II (講義棟A 2F 208教室)

10:50-11:30 司会 貝塚泰幸 (首都大学東京非常勤講師)

5. 中英語 *Octavian* における階級意識の衝突とサラセン商人の移動性
趙 泰昊 (慶應義塾大学非常勤講師)

11:40-12:20 司会 張替涼子 (東京理科大学)

6. 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における典拠翻訳
狩野晃一 (明治大学)

10:00-12:20 **研究発表Ⅲ**（講義棟A 2F 204教室）

10:00-10:40 **司会** 野地 薫（関東学院大学他非常勤講師）

7. “no womman of no clerk is preysed”
—「バースの女房の話」と「学僧の話」における女性を巡る言説—
松本小夜子（立命館大学大学院）

10:50-11:30 **司会** 谷 明信（兵庫教育大学）

8. 『カンタベリー物語』における動詞命令形の語尾の語用論的機能
泉類尚貴（慶應義塾大学大学院）

11:40-12:20 **司会** 濱口恵子（元土佐女子短期大学教授）

9. チョーサーの「不変性」について
—“The Man of Law’s Tale”と *Lak of Stedfastnesse* を中心に—
本田崇洋（福島工業高等専門学校）

13:15-13:25 **閉会式**（講義棟A 3F 308教室）

閉会の言葉

副会長 和田葉子（関西大学）

PROGRAMME

SATURDAY 30 NOVEMBER

11:30–16:00 Registration (Entrance Hall, 1F, Bldg. A)

*Members' Tea Room (Lecture Room 304, 3F, Bldg. A)

12:00–13:00 Poster Session (Lecture Room 205, 2F, Bldg. A)

13:00–13:30 Plenary Session (Lecture Room 308, 3F, Bldg. A)

President: KANO, Koichi, Meiji University

Opening Address

TERASAWA, Jun

President of JSMES, University of Tokyo

Welcome Address

KAKUYAMA, Takashi

President, Tokyo Future University

Reports and Announcements

13:45–14:45 Inaugural Lecture (Lecture Room 308, 3F, Bldg. A)

President: JIMURA, Akiyuki, Okayama University of Science

The Art of Reading *Beowulf* Slowly

TERASAWA, Jun, President of JSMES, University of Tokyo

15:10–18:10 Special Symposium (Lecture Room 308, 3F, Bldg. A)

Editing and the Interpretation of Texts:

Past, Present and Future Practices

President: TAGUCHI, Mayumi, Osaka Sangyo University

Discussion President: SCAHILL, John

Insearch, University of Technology Sydney

I. Editing a Four-Manuscript Diplomatic Parallel Text of *The Ancrene Wisse*: Aim, Procedures and Results

ONO, Shoko, Professor Emerita, Tokyo Woman's Christian University

II. How Editing Monastic Foundation Narratives Uncovers their Meaning and Purpose

BURTON, Janet, University of Wales Trinity Saint David

III. Transcribing and Printing as Editorial Interpretations: A Comparative Case Study on *The Canterbury Tales*

OHNO, Hideshi, Hiroshima University

IV. Choices Editors Make and their Consequences

CONNOLLY, Margaret, University of Saint Andrews

V. Pepysian *Meditations on the Passion of Christ*: Its Editorial Procedures Revisited

IYEIRI, Yoko, Kyoto University

VI. The Middle English Texts Series (Heidelberg): Aims and Objectives

MARX, William, University of Wales Trinity Saint David

VII. Editing Caxton's *Golden Legend* and the Materiality of the Text

TOKUNAGA, Satoko, Keio University

VIII. From Editing Manuscripts to Editing Incunabula: Caxton's *Golden Legend*

SCAHILL, John, Insearch, University of Technology Sydney

Other panellists

IKEGAMI, Keiko, Professor Emerita, Seijo Junior College

NAKAO, Yoshiyuki, Fukuyama University

JIMURA, Akiyuki, Okayama University of Science

18:40-20:40 Reception (Student Hall, 1F, Bldg. B)

SUNDAY 1 DECEMBER

9:00-10:00 Poster Session (Lecture Room 205, 2F, Bldg. A)

9:30-10:50 Registration (Entrance Hall, 1F, Bldg. A)

*Members' Tea Room (Lecture Room 304, 3F, Bldg. A)

10:00–13:10 Paper Session I (Lecture Room 308, 3F, Bldg. A)

10:00–10:40 Presider: SHIRAI, Naoko, Bunka Gakuen University

1. The Earth Cries Out: Inanimate Aurality in Anglo-Saxon Literature
BROOKS, Britton, University of Tokyo

10:50–11:30 Presider: SHINKAWA, Seiji, Waseda University

2. Representation of Subjects in the Old English Interlinear Translation of Cambridge Psalter

KOBAYASHI, Shigeyuki, Seigakuin University
/ Visiting Researcher, Graduate School of Nagoya University

11:40–12:20 Presider: SHINKAWA, Seiji, Waseda University

3. Auxiliaries in Interlinear Glosses
OGURA, Michiko, Tokyo Woman's Christian University

12:30–13:10 Presider: ICHIKAWA, Makoto, Tokyo University of Science

4. Reinventing the Old Testament Prophecies: Method and Style in *Ælfric's De Natale Domini*

OGAWA, Hiroshi, Professor Emeritus, University of Tokyo

10:50–12:20 Paper Session II (Lecture Room 208, 2F, Bldg. A)

10:50–11:30 Presider: KAITSUKA, Yasuyuki, Tokyo Metropolitan University

5. Conflicting Class Values and the Association of Saracens with Fluid Merchants in the Middle English *Octavian*

JO, Thae-Ho, Keio University

11:40–12:20 Presider: HARIKAE, Ryoko, Tokyo University of Science

6. Translation and Adaptation of Sources in *The Chronicle of Robert of Gloucester*

KANO, Koichi, Meiji University

10:00–12:20 Paper Session III (Lecture Room 204, 2F, Bldg. A)

10:00–10:40 Presider: NOJI, Kaoru, Kanto Gakuin University

7. "no womman of no clerk is preysed": Discourses on Women in *The Wife of Bath's Tale* and *The Clerk's Tale*

MATSUMOTO, Sayoko, Graduate Student, Ritsumeikan University

10:50-11:30 Presider: TANI, Akinobu, Hyogo University of Teacher Education
8. Pragmatic Functions of Imperative Endings of Verbs in *The Canterbury Tales*

SENUI, Naoki, Graduate Student, Keio University

11:40-12:20 Presider: HAMAGUCHI, Keiko,

Former Professor of Tosa Women's Junior College

9. An Aspect of Chaucer's Constance and Steadfastness

HONDA, Takahiro, National Institute of Technology (KOSEN),
Fukushima College

13:15-13:25 Closing Address (Lecture Room 308, 3F, Bldg. A)

WADA, Yoko, Vice-President of JSMES, Kansai University

発表要旨

第1日 11月30日(土)

15:10-18:10 企画シンポジウム (講義棟A 3F 308教室)

Editing and the Interpretation of Texts: Past, Present and Future Practices

Project “Editing Caxton’s *Golden Legend*, vols 1 & 2” (Grant-in-Aid for Scientific Research (B) 15H03190) hosts an international symposium on editing medieval texts, inviting three Japan-based editorial teams (*Ancrene Wisse*, *Canterbury Tales*, *Meditations on the Passion of Christ*) as well as three specialists from the UK: Prof. William Marx (General Editor of the Middle English Texts series, Council member of the Early English Text Society), Dr. Margaret Connolly (General Editor of the Middle English Texts series) and Prof. Janet Burton (General Editor, Boydell and Brewer, Monastic and Religious Orders series).

This symposium proposes the theme that “editing” a manuscript or incunable text is inseparable from “interpretation”. The issue has drawn much attention in recent medieval studies, and cannot be simply solved by going back to manuscripts or incunabula, because each manuscript or incunable edition is the result of interpretations and decisions on the part of the mediator(s) between the author and the reader: namely scribes and printers. We know we cannot blame such freedom exercised by scribes and printers since it was part of the literary culture of the period. On the other hand, it does not seem to be recognized well enough that modern editions are also results of interpretations and decisions. Anybody will learn that this is the truth once he/she visits ultimate sources and communes with them for some time. Furthermore, we’ll learn to accept that such historical dictionaries as the *OED* and the *MED* are based on such interpretations and decisions made by individual editors according to a variety of editorial policies as well as those made by dictionary editors. Dealing with limited survivals from a *fluid* era, there inevitably are limitations, but modern editors have striven to seek to capture the best picture of the object in question. The editor’s path is

not smooth, and sometimes frustrating, but it is always enlightening and rewarding. Each participant will bring to the table some interesting stories about the findings from their experiences.

This session consists of two parts: lightning paper presentations (60 mins) and discussion (90 mins): Four Japan-based editorial teams (including the Caxton team) and three panellists from the UK will first present short papers, introducing their past/current editorial projects and experiences, and presenting issues for the following discussion. The discussion will be further divided into two parts (each 45 mins): in the first part, there will be additional panellists/discussants from the editorial teams, and after a break, we'll invite the audience to join the second part of the discussion. The subject is of fundamental importance to every medieval scholar, as we cannot work without using edited texts. We sincerely hope this symposium will offer an occasion for wide-ranging exchanges of opinions between the panellists and the floor, and between the West and the East.

Participating guests and editorial teams are as follows:

- William Marx (*An English Chronicle 1377-1461: A New Edition*, Medieval Chronicles, 3 (Boydell & Brewer, 2003); *The Middle English 'Liber Aureus and Gospel of Nicodemus' edited from London*, British Library, MS Egerton 2658, MET 48)
- Margaret Connolly (*The Middle English Mirror: Sermons from Advent to Sexagesima*, MET 34, with Thomas G. Duncan; *Insular Books: Vernacular Manuscript Miscellanies in Late Medieval Britain* (Oxford University Press, 2015), with Raluca Radulescu)
- Janet Burton (*Historia Selebiensis Monasterii: The History of the Monastery of Selby*, critical edition, with translation, commentary, and introduction, Oxford Medieval Texts (OUP), 2013)
- *Ancrene Wisse* group: Keiko Ikegami and Shoko Ono (*Ancrene Wisse: A Four-Manuscript Parallel Text*, ed. by Tadao Kubouchi, Keiko Ikegami with John Scahill, et al. (Peter Lang, 2005); *The Katherine Group: A Three-Manuscript Parallel Text: Seinte Katerine, Seinte Marherete, Seinte Iulienne, and Hali Meidhad*, with Wordlists, ed. by Shoko Ono and John Scahill with Keiko Ikegami et al. (Peter Lang, 2011); *Sawles Warde and the Wooing Group: Parallel Texts With Notes and Wordlists*, ed. by Harumi Tanabe and John Scahill with Shoko Ono, Keiko Ikegami et al.

(Peter Lang, 2015); *Barlaam and Josaphat: A Transcription of MS Egerton 876*, ed. by Keiko Ikegami (AMS Studies in the Middle Ages, 1999))

- *Canterbury Tales* group: Hideshi Ohno, Yoshiyuki Nakao, and Akiyuki Jimura (Computer-assisted Textual Comparison Project in progress, with Noriyuki Kawano (Hiroshima Univ.) and Kenichi Satoh (Shiga Univ.))
- *Meditations on the Passion of Christ* group: Yoko Iyeiri and Mayumi Taguchi (MET 56)
- Caxton's *Golden Legend* group: Mayumi Taguchi, John Scahill, and Satoko Tokunaga (submitting to EETS)

第2日 12月1日(日)

10:00-13:10 研究発表 I (講義棟 A 3F 308教室)

10:00-10:40 司会 白井菜穂子 (文化学園大学)

1. The Earth Cries Out: Inanimate Aurality in Anglo-Saxon Literature

Britton Brooks (東京大学)

Sound is a peculiar form of sensory input. Unlike visual information, which includes objects perceptually at rest and in motion, sound requires an event, sound requires action, the creation of pressure waves that ricochet around our inner ear. Aurality, however, is widespread in Anglo-Saxon literature, from the poetic songs of wolves in *Exodus*, to the vocalizations of objects in the Old English *Riddles*. While there is a growing body of scholarship analyzing the use of animate sounds, of people, wolves, and birds, and of sounds relating to human artifice, of books, tools, and trumpets, there remains an area relatively uninvestigated: inanimate natural sounds, from wind and rain, to water and tree. This paper will explore the ways Anglo-Saxons both perceived and constructed the inanimate natural world by way of its aural qualities in their textual tradition, both Anglo-Latin and Old English. I will argue that such constructions stem from a syncretic view of the natural world based on Christian theology, classical examples, patristic exegesis, and pre-Christian Germanic beliefs. I will seek to categorize and explain the variety ways these

sounds were employed, including descriptive uses in boundary clauses, prognostic uses in the Anglo-Saxon Chronicle, and literary uses in poetry and hagiography. This paper will grant us a deeper appreciation of the ways Anglo-Saxons interacted with, considered, and represented the natural world in their artistic productions.

10:50-11:30 司会 新川清治 (早稲田大学)

2. Cambridge Psalter の古英語行間訳語における主語表示

小林茂之 (聖学院大学・名古屋大学大学院人文学研究科客員研究員)

書記言語としての古英語は、行間訳語から翻訳を通して発達したと一般に想定されている。その意味で、古英語訳語付き『詩篇』(Old English Glossed Psalters) における古英語行間訳語 (interlinear gloss) は書記言語として発達途上にあった初期古英語とその後の変化を直接的に比較できる資料である。ケンブリッジ大学図書館蔵 Cambridge Psalter (MS Ff.1.23) は、11世紀の写本である。さらに古い同様の写本である大英図書館蔵 Vespasian Psalter (MS Cotton Vespasian A. 1) は、8世紀に書写され、9世紀に古英語行間訳語が付されたとされている。

この研究は、Vespasian Psalter と Cambridge Psalter における古英語行間訳を比較した結果、前者における主語非表示に対して後者における主語表示という違いが認められることについて論じる。

11:40-12:20 司会 新川清治 (早稲田大学)

3. 行間注釈内の助動詞

小倉美知子 (東京女子大学)

古英語は、法においては subjunctive, conjunctive, optative の形態的区別がなく、future, perfect の時制の区別もなく、passive も *hatte* 以外は残っておらず、2人称以外に対する命令形もない状態で、書き物に登場することになった。その言語がラテン語を訳すとき、subjunctive 以外で用いたのが auxiliaries である。法助動詞と不規則変化動詞、*beon/wesan/weorðan, habban, onginnan, uton* 等が、現代英語より幅広い意味・機能で用いられていたことにより、動詞の不定形や過去分詞形を伴った迂言形の発達を促し、英語の syntax を特徴づけていったと言える。本論では、ラテンに対する行間注釈に焦点を当て、そこで用いられた迂言形とその functional equivalents を観察することにより、

どの形が選ばれて後の英語の発達に寄与したかを探る。

12:30-13:10 司会 市川 誠 (東京理科大学)

4. Ælfric の旧約解釈——*De Natale Domini* における預言の引用とその文体

小川 浩 (東京大学名誉教授)

Ælfric の *De Natale Domini* (CH II, 1) は降誕祭のための説教であるが、福音書のテキストを離れて降誕の教義に関わる問題を扱う。特に、旧約聖書中のキリストについての預言を扱う部分 (121-266行) が全体の中核をなす。本発表では、この「預言者たちの証言」の引用の方法と文体について考える。旧約の言葉の本来の文脈と預言としての解釈の間には理屈では越え難い距離がある。そこを Ælfric はどのように表現し、旧約の言葉を (『岩波 キリスト教辞典』s.v. 「聖書解釈」の表現を借りるならば) どのように彼の「現在」に「翻訳しよう」としているか。M. R. Godden は、Ælfric の引用には ‘unusual wording’ など多くの特異な点があるという意味のことを述べているが (EETS, s.s. 18, p. 347), 少なくともその一部は、上述の意味での「現在化」の現れと解することはできないか。そのような観点から、この作品の三つの一節 (170-76, 194-205, 222-66行) を中心に論じたい。

10:50-12:20 研究発表Ⅱ (講義棟A 2F 208教室)

10:50-11:30 司会 貝塚泰幸 (首都大学東京非常勤講師)

5. 中英語 *Octavian* における階級意識の衝突とサラセン商人の移動性

趙 泰昊 (慶應義塾大学非常勤講師)

中英語ロマンスに登場する商人はしばしばサラセン表象と結びつき、キリスト教徒と異教徒の間を行き来する存在として、宗教的・地理的な境界線を越える性質を付与されている。本発表では、このサラセンと商人の結びつきを軸に、中英語ロマンス *Octavian* においてこうしたイメージが物語の進行およびその解釈にどのような影響を与えるかという点を考察することを目的とする。

本発表は主に商人の養子として育てられる Florent に焦点を当て、彼の商人から騎士への社会階級における上昇が、サラセンの改宗に類出するモチーフを用いて描かれていることを指摘する。改宗したサラセンの騎士のように、

Florent はサラセンとの戦闘やそれに付随する冒険を通して自らの身分を確立しており、この点に注目すれば、階級間の価値観の違いを扱うと考えられてきたこのロマンスを、社会階級間の移動の可能性を示しながら、貴族階級と商人階級の協力関係の確立を促すような性格を備えた物語として読むことができる。

11:40-12:20 司会 張替涼子（東京理科大学）

6. 『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』における典拠翻訳

狩野晃一（明治大学）

『ロバート・オヴ・グロスターの年代記』 *The Chronicle of Robert of Gloucester* (fl. c.1260-c.1300. 以降『年代記』) は、ブリテン建国からヘンリー3世までの時代を描いた初期中英語期の韻文作品である。歴史的記述には、作者と同時代の出来事のほかに、ジェフリー・オヴ・モンマス『ブリタニア列王史』やヘンリー・オヴ・ハンティンドン『イギリス人の歴史』、その他多くの材源が用いられている。

『年代記』の典拠特定調査は、現在まで主に Hearne (1724), Wright (1887), Hudson (1964) で行われたものに限られている。これらの研究では、その歴史的描写は使用典拠に比較的忠実であると評価を下している。だが『年代記』に関する文学的・言語学的研究は現在までさほど多いとはいえ、典拠使用における言語学的調査も未だ不十分である。

原拠情報を散文から韻文へ翻訳・転換する際の技法に着目してテキストを見直すと、この韻文年代記を英語で編むにあたっての作者の腐心や手法が垣間見える。本発表では諸典拠と『年代記』本文を詳細に比較し、詩作の様相の一端を明らかにすることを目的とする。

10:00-12:20 研究発表Ⅲ（講義棟A 2F 204教室）

10:00-10:40 司会 野地 薫（関東学院大学他非常勤講師）

7. “no womman of no clerk is preysed”

—「バースの女房の話」と「学僧の話」における女性を巡る言説—

松本小夜子（立命館大学大学院）

「バースの女房の話」と「学僧の話」は正反対の結婚観を主張するものだが、これらの語り手は、異性を教化しようとして失敗に終わる点で共通している。

バースの女房は巡礼の男性陣に説教しようと語るが、托鉢僧らに一蹴される。一方、学僧もまた、女性のあるべき姿を描いたグリセルダの話語るが、最後に自ら滑稽なコメントを挿入することで、説教の効果を台無しにしてしまう。このように教化に失敗するパターンは、バースの女房の五人目の夫ジャンキンにも共通している。これらには、女性嫌悪に基づいた女性像を介して説教を行うことへの風刺が込められているのではないだろうか。特に学僧の話については、女性への説教としての効力を打ち消すことで、男性の説く女性像に疑問を持つよう女性たちに促していると言える。本発表では、「バースの女房の話」と「学僧の話」の対構造に着目することで、チョーサーの女性観の一端を探りたい。

10:50-11:30 司会 谷 明信 (兵庫教育大学)

8. 『カンタベリー物語』における動詞命令形の語尾の語用論的機能

泉類尚貴 (慶應義塾大学大学院)

英語史における顕著な変化の一つに屈折語尾の衰退がある。動詞の命令形も、古英語期には命令する相手の数により語尾が分けられていた一方で、15世紀の中ごろにはその区別は消失したとされている。

もう一つ、中英語において数の一致の問題として広く知られている現象として、2人称代名詞の T/Y distinction があるが、この用法は、チョーサーやガウエインをはじめとする諸作品で効果的に利用されている。

チョーサーの言語において、本来であれば複数を示す命令形の語尾を、単数の相手に用いている例が見られる。この語尾の機能について、Mann (2005) や Kerkhof (1982) は丁寧さを付け加える機能があると言及している反面、Horobin (2003) では、韻律の要請によるものにすぎないと論じている。

本研究では命令形の語尾の揺れが見られる作品の一つである *The Canterbury Tales* を中心資料として命令文のデータを収集し、命令形の語尾が丁寧さを表す機能があるのかどうかを、写本間のバリエーションにも目を向けつつ検証することを目的とする。

現代英語に見られる動詞と指令表現の相関性を考慮し、本研究においても、動詞の種類と語尾の有無の関係、命令形と共起しやすい丁寧標識と語尾の有無の関係性についても議論する。

11:40-12:20 司会 濱口恵子（元土佐女子短期大学教授）

9. チョーサーの「不変性」について

—“The Man of Law’s Tale” と *Lak of Stedfastnesse* を中心に—

本田崇洋（福島工業高等専門学校）

“The Man of Law’s Tale”（以下 ML）のクスタンスの絶望にも屈しない堅固な信仰心は、その名の通り、“constance”（不変）である。一方で、物語は、幸福と絶望が繰り返される「不安定さ」が特徴である。本発表では、MLを中心に、チョーサーが物語で表現する「不変性」について考察したい。

“constance” の同義語は “steadfastness” である。チョーサーは *Lak of Stedfastnesse*（以下 LS）という教訓風詩を書いている。ML と LS では、「不変」の有無という点で一つの繋がりを見ることができる。二つの詩では「不変性」の破壊が「権力者」に起因するという点でも共通している。同時に、LS では「安定」という理想を「権力者」に求めるが、ML もその理想に関わっているのは「権力者」である。

“constance” や “steadfastness” で表現される「不変性」には「権力者」との関わりが強い。チョーサーは作品の中で政治的な意見を主張することはないが、少なくとも、「権力者」というテーマは作品の中で重視しているものの一つであると言える。



英語学パースペクティブ

英語をよりよく理解するための15章

龍城 正明 編著

A5判 408頁

定価(本体 3,200円+税)

ISBN 978-4-523-30075-5

中英語の統語法と文体

田島 松二 著

A5判 296頁

定価(本体 4,600円+税)

ISBN 978-4-523-30076-2

鬱蒼たる中世英語の森探索の比類なき道しるべ!



南雲堂

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 361

E-mail : nanundo@post.email.ne.jp

TEL : 03-3268-2311

最強のリスニング強化マガジン



ENGLISH EXPRESS

CNNライブ収録CD付き 毎月6日発売 定価1,240円(税込)

英語が楽しく続けられる!

重大事件から著名人のインタビューなど、CNNの多彩なニュースを生の音声とともにお届けします。3段階ステップアップ方式で初めて学習する方も安心。

資格試験の強い味方!

ニュース英語に慣れれば、TOEIC®テストや英検のリスニング問題も楽に聞き取れるようになります。



詳しくはこちら

定期購読をお申し込みの方には本誌1号分無料ほか、特典多数。詳しくは下記ホームページへ。

<https://www.asahipress.com/>

朝日出版社 〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-3-5 TEL 03-3263-3321

英宝社 好評既刊本

O.イエスペルセン 著 米倉綽 監訳 A5判/440頁/5,800円+税

英語の成長と構造 Growth and Structure of the English Language

ジェフリー・チョーサー作 笹本長敬 著 A5判/296頁/3,400円+税

トロイルスとクリセイデ 付・アネリダとアルシーテ

GEOFFREY CHAUCER 著 松下知紀 訳・注 A5判/308頁/2,800円+税

THE CANTERBURY TALES THE KNIGHT'S TALE カンタベリー物語・騎士の物語

英宝社

<http://www.eihosha.co.jp>

